

東北まちづくりオフサイトミーティング 第2回勉強会

基調講演

『住民主体による地域づくりと協働の在り方』

講師 NPO法人きらりよししまネットワーク
事務局長 高橋由和 氏

メンバー・感想集



平成22年5月

栗原市役所 鈴木 敬

今回、高橋事務局長さんのお話を伺い、やはり実践者の方の話はとても分かりやすく、自分の地域のコミュニティ活動と照らし合わせながら聴くことができました。

自分も恥ずかしながら地域コミュニティ組織の事務局を10年程度続けていますが、地域の各種団体の縦割り、連携の難しさを痛感しています。

会議などで話し合いの場を持っても所詮各団体長が充て職として役員になっているので、その場だけの話になりやすく、まったく地域住民に届かない。しかも「地域課題」に対する役員の考えと地域の方々の考え方に乖離があったり。。

今回、高橋事務局長さんのお話を聴いて、すべてが自分の地域課題の解決策として結び付くものではありません。それは当然のことです。

まずは「自分たちの地域を将来どうしたいのか?」、それを目指す上で解決すべき地域課題をきちんと把握し、その課題策を話し合うこと、話し合ったことを地域の方々にフィードバックし、話し合いの中から、解決策をみんなで見出していく。その解決策のツールとして、きりりよしじまの取組みから真似られるものを取り入れていく。そんな感じで進めていけたらいいなあと思います。

今回、講話を聴いて、最近、そのこと自体がなかなか進まず、頓挫している状況なので、もう少し粘ってやっていこうかなと勇気をもらいました。

行政マンである前に、地域の一住民、更に自分の場合は事務局の一員というポジションに置かれている中でどうアクションを起こしていくべきか、再認識させられた時間でした。

山形市役所 高橋 昌史

「地域づくりは草の根からの積み上げ」、地域住民と一緒に歩んでいかないと地域づくりは出来ない。

全くその通りで、地域づくりにおいて、現場を知らない人は語っても説得力に欠けると考えております。しかしながら、その現場に顔を出すことは生易しいものではなく、また、自分一人では出来ることに限界があることを知っており、他人の力を借りることが必要だと考えております。

人材育成プランなどお話を聞いて、このようなステージ分けをして行っていくものだと大変勉強になりました。まずは今、自分が関わっている地域の方々のやる気を高めつつ、どのように行ったら人材育成・世代交代が上手くいくのか、地域の方々と共に考えていこうと気持ちを新たにしました。

山形市役所 後藤 好邦

高橋事務局長からNPO法人きらりよしじまネットワークの活動についてお聞きし、私自身、地域活性化には以下の4点が重要との認識を持ちました。

- ①現状における課題の把握と解消（ムダ・ムリ・ムラの解消）
- ②地域ビジョンを有し行政に依存しない地域づくり（財政的自立）
- ③すべての地域住民が主役となる仕組みづくり（子どもと高齢者を巻き込む必要性）
- ④20年後を見据えた人財づくり（継続的な若手（人財）育成の仕組みづくり）

まず地域活性化にとって必要なことは、活性化の阻害要因ともいえる多くのムダ・ムリ・ムラを取り除くことだと思います。残念ながら、この3要素は私が所属する役所内部にもみられるもので、活性化すべき地域や組織にある共通の負の財産だと思います。過疎化している地域や自治体など、厳しい状況に陥っている地域や組織を活性化していくためには、いかに限られた資源（ヒト・モノ・カネ・時間）を効果的に活用していくかが重要になります。その点で、資源浪費のもとであるムダ・ムリ・ムラをまずは取り除くことが活性化に向けた第一歩だと思います。ただし、従来あった仕来たりや慣習、制度を無くすことは非常に困難なことであり、おそらく、そのことが原因で多くの地域が活性化できずにいるような気がします。いろいろなご苦労があったことは想像に難くありませんが、この課題をクリアし活性化に成功した“きらりよしじまネットワーク”の取組みは称賛に値するものだと感じました。

次に地域活性化のためには、地域ビジョンを持ち役所に依存しない自立した地域づくりを行うことが必要だと思います。現在、地域をサポートすべき行政も財政的に大変厳しい状況に陥っています。そのため、地域への補助金や助成が恒久的に継続して行われる保証はまったくない状況です。このようななかで、外的要因に影響されず地域づくりを行っていくためには、独自財源を確保し行政に依存しない体制を整備したうえで、地域の目指すビジョンの実現に向け一致団結して取り組んでいくことが重要だと考えます。高橋事務局長が、「うちは行政と対等の立場を目指している」と話されていたように、きらりよしじまネットワークはコンビニと連携した産直販売など財源確保のための諸活動を実践しながら地域づくりの3本の柱の実現に向け取り組んでいます。これらの取組みや地域づくりに対する意識は、他の地域にとって大いに参考になるものだと感じました。

鹿児島県の“やねだん”や徳島県の“株式会社いろうり”など、これまで地域活性化に成功しているいくつかの事例について学ぶ機会がありましたが、私の所感では、どの事例も高齢者が何らかの役割を果たしている、あるいは高齢者が生き生きと活動しているといった共通点がありました。高橋事務局長が地域おこしには「ジジ・ババと子どもが大事」とおっしゃっていたように、上記した事例と同様、きらりよしじまネットワークも高齢者が積極的に地域活動に入り込めるような仕掛けづくりを随所に見てとることができました。活性化といえば、とかく若者が注目されがちですが、真に大切なことは高齢者をいかに活かしていくかだと思います。その点でも、ワークショップへの参加や世代間交流による諸事業を通して、高齢者に活躍する場をつくり、生きがいをもたらす様々な施策を提供している“きらりよし

じまネットワーク”の活動は、枯渇していく地域が目指すべき方向性を示していると考えます。

最後に、私自身最も共感を受けたことですが、20年後を見据えた人財育成ということで、きらりよしじまネットワークでは将来を見越し継続的な人づくりに取り組んでいました。持続可能な地域を創り上げていくためには、その地域のリーダーを継続的に創り上げていく必要があります。この点は地域に限らず、いかなる組織にもいえることだと思います。しかし、活性化の必要性がある地域や組織の場合、目の前にある危機を回避する活動にばかり目が行きがちで、将来にまで目が行き届かないケースが多々あるように思われます。残念ながら、これでは活性化のための活動も一過性のもので終わってしまい、継続的に活性化のサイクルをまわしていくことは不可能だと考えます。この点を踏まえながら地域の中からリーダーを育成し、将来のリーダーづくりに余念がない同法人の活動は、地域に限らず、様々な組織にとって参考とすべき取り組みだと感じました。

以上、私が感じた点を4点にまとめてみましたが、この他にも学ぶべきことが多々ありました。その点でも、非常に意味あるお話をお聞きすることができ、大変に有意義な時間を過ごすことができたと感じております。しかしながら、本当の意味で同法人の素晴らしさを感じるためには、吉島地区を訪問し、地域の方々と直接交流する必要があると感じています。今回の講演を契機として、今後とも、きらりよしじまネットワークの方々と交流していきたいと考えておりますので、引き続きよろしくお願いたします。

山形県庁 加藤 法弘

今回の勉強会は地域住民と行政との関わりをテーマにとっても有意義なものとなりました。

特に、NPO法人きらりよしじまネットワークの高橋事務局長による講演は、これからの地域づくりを考えていく上でとても参考となるものでしたが、講演の中で、地元で営業するコンビニの敷地内に新たに農産物直売所を設置することを提案した際に、地域密着の関わり方の必要性をコンビニのエリア担当者に説くことで、本社においても前例がなかった今回の提案を認めてもらったという事例がありました。

これには、取り組みに対する高橋事務局長の熱意、そして当該提案を最終的に承諾いただいたコンビニ会社の協力があつた点はもちろんですが、ポイントは、全国的に画一的、統一的なサービスが求められているコンビニが、その地域の実態に合致するように、その関わり方を変化させたという点にあるのではないのでしょうか。そして、これを今後の地域コミュニティのあり方に置き換えるならば、決して全国共通の最適解があるわけではなく、都市部や農村部などその地域の実態や特性を踏まえ、その特質を変容させていかなければならないことを意味しています。

その意味で、これからの地域コミュニティを考えていくうえでは、やはりそこに住む住民や行政職員が自らの地域を考え、一緒に行動していくという“住民自治”の精神が極めて重要であると改めて感じました。

北上市役所 佐々木 範久

戦略＝ビジョン＋アウトプット＋アウトカム。目指すことを掲げ、そのために必要な活動をすることで、ぶれのない活動となり、成果を上げることができることにつながるということに気付かされた集会でした。

大場さんの風のたよりからの問題提起から、きらりよしじまネットワークの高橋事務局長さんの実践事例までの点がOMの勉強会という場を通じて、線として受け止めることができたような気がしています。

半年ほど前、北上市でご講演いただいた際もお話を拝聴させていただいておりましたが、その時の内容に加え、今回はワンストップのお話をもっとも記憶に残っております。本物の協働を進めるためには「市民側」だけでなく「行政側」での課題の受け入れ体制をしっかりと作るべきとのご提言は非常に考えさせられる部分が多く、当市の交流センターを通じた協働の地域づくりにおいて点検すべき部分でもあろうと思ったところです。

さらに、当市は桜井先生にもお世話になっており、今後展開される中間支援活動にも非常に興味があります。そちらの活動についても参考にさせていただきながら、当市での活動に活かしていきたいと思いますので、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。

栗原市役所 高橋 千穂

まずは、基調講演の“きらりよしじま”の活動については、「すごい（溜息）」の一言につきましました。あの話は自分の所属課の職員全員聞いた方がいい！とも。事前にPPTを拝見した時にも「すごさ」を感じましたが、話を聞いて益々その思いを強くしました。

行政として耳が痛いご指摘もありましたが、あのよう地域全体を巻き込んでうまく物事を進めていく手法は、コミュニティ事業だけでなく多くのことに活用できそうです。

“きらりよしじま”が最終形のパーフェクトでは無いですが、コミュニティ活動を楽しく・面白くする取組は参考にしていきたいですね。

栗原市役所 大関 友好

栗原市は、宮城県の西北端、岩手県と秋田県との県境の栗駒山の麓に広がる、平成17年4月の10か町村合併で誕生した広い街です。山形県鶴岡市や岩手県一関市には及びませんが、面積が約805平方キロメートルあります。

今回、KMTメーリングリスト（カリスマ公務員＝前農水省企画官で現小樽市職員の本村俊昭氏のメーリングリスト）から、研修会の情報を得て参加いたしました。

私は、合併後の5年間、教育委員会社会教育課に籍を置き、主に青少年教育を担当する傍ら、「地域活性化」や「市民との協働のまちづくり」をテーマに「人とのネットワークづくり」、「人材育成」のために、おもに市役所の外の人達と活動をしてきました。まさに今回のテーマは自治体職員になかなか理解してもらえない「住民主体」とか「協働」のアプローチ手法を、外の人が住民目線でどう仕掛けているかという活動を学ぶ機会と思い、主宰者の後藤様に即メールした次第です。

高橋様のお話を拝聴し、まず「地域に対する人並み以上の情熱」を感じました。「地元に戻った時、あなたは何ができますか？」「家族というコミュニティ、隣組というコミュニティ、集落というコミュニティで、あなたの役割は？」様々な関係性や共感性が途切れている昨今、自治体職員も地域で、自分が住む小さなコミュニティで何ができるのか、役所での拘束時間が長く、地域にとってもなかなか入り込めないのが実態ではと思いますが、40歳を前に家庭、集落、PTAなどでの役割を振り返る機会となりました。

また、「危機感からの連帯意識」にも共感を得ました。私も「地域づくりは危機感の共有から」という思いがあり、様々な事例に触れ、合併後に完成した市民活動支援センターの有効活用を考えている中で知り合った仲間と毎月第2水曜日に「カフェ」を開催し、「地域づくりのタネ探し」に取り組んでいます。

そして、何とんでも「20年後をイメージした地域づくり！」何のための、だれのための、どんな地域（街）にしたいのか？！と、いうビジョンを持ち、そのための仕掛けとしての人材育成の手法、様々な団体を巻き込んでのコミュニティビジネスなどで組織の基盤を固めながら、地域の若い人材の受け皿（サイクル）を作っていることなど、社会教育施設（公民館）をこんなにも有効活用している事例が身近にあったのかと、改めて自分の収集力の無さと行政的発想の無力さに気づく機会にもなりました。やっぱり、これからの自治体職員は、異質性と多様性を持った人材とつながることが必要ではないでしょうか？

そして、できることから顔と顔がつながるネットワークづくりが必要ではないかと思いました。「地域活性化」とは「人の動きが絶えず動いていること」話の随所にヒントが隠されとても良い刺激になりました。

幸いにも、山形県置賜地域は私個人としては仕事や地域づくり活動で知り合った講師や自治体職員の方々がおりたくさん学ばせていただいた地域です。今回の研修会にゲスト参加していただいた、東北大学大学院の石井山先生には社会教育主事講習以来、

機会あるごとにご指導をいただいております。

今後も皆様とのネットワークを生かし、皆様の活動を糧に「インプットからアウトプットへそしてよりよいアウトカム」を目指して活動をしてまいります。

最後に、東北各地に、そして我が栗原市役所に、自治体職員として同じベクトル持った「志高き仲間」がいたこと、これが今回の研修の成果だったと振り返って帰ってきました。

上手にまとめることができず、独りよがりな感想になりましたが、次回の酒田市での研修を楽しみにしています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

栗原市役所 大友 翔太

まず、講演を聞き終わって純粋に凄いなと感じました。全員が参加するというところが、一番の驚きです。こういった取り組みって大概は、志のある数人が熱い気持ちでやっていて、周りの人はそれについていだけとか、どっか一步引いたところから見ていたりすることが多いと思います。全員が参加となれば一人ひとりが中心人物なのだから、自分たちから何か行動してみようとか、何か提案してみようとか、また、他の人を見てこれやってみようとか、色々な面できっとプラスなのだろうなと思います。

次に関心をもったのは、次を担う人材を「探してくるのではなく、育てる」というスタンスです。どんな活動でも、中心となる人物には経験もあり、人脈や繋がりもあるので、周りはそれにおんぶに抱っこになりがちです。そのため、なかなか次を担う人が育たないということがよくあります。そういった場合、大抵は即戦力になるような人を探してしまいがちですが、そうすると結局次の世代は育ちません。付け焼刃に過ぎないのです。やはり、一緒に活動しながら次の世代を育てていくことで、その組織はより強固になって絆も深まりますし、受けついだ人たちが自分たちの経験を活かして、また次の世代を育てていけるのだと思います。

私ごとになりますが、私は今、地域を盛り上げていこうというような趣旨で青年団的な活動をしています。どちらかといえば私は次を担う世代の方に分類されるので、今は色々な経験を積み重ねている最中です。活動を通して色々な経験をしました。それを、また次の世代にバトンタッチしていけるように頑張らないといけないなと思いました。

宮城県庁 五十嵐 健裕

日本の一流企業のものづくりの核心にある哲学が、「ひとづくり」「地域づくり」に応用されていることに感心した。

～地域づくりにカスタマイズされたトヨタ生産方式（TPS）～

まず、ところどころにトヨタ生産方式の核心となる考え方「ジャストインタイム（JIT）」・「ムリ・ムダ・ムラの発見」などが、地域づくりの手法としてうまくカスタマイズされて取り入れられていることに驚いた。

なぜならそれまで私の中では、トヨタ“生産”方式とは、文字通り「製造業など、コスト削減・売上げ拡大による利益確保が必要な業界での効率化に使う手法」というイメージを持っていたからである。

これまでの実績として、会計の一元化、合意形成一元化、決定事項の迅速化、充て職の排除、若年層の登用など、全てが参考になることばかりだった。とりわけ私の経験上苦い思い出のある「会計の一元化」についてはぜひやりたいと思った。地域には多くの通帳があり、中には長期でその職を務めるためチェック（監査）が行き渡らず、既得権益化・私物化する人がいたからだ。

～「会議」でなく「話し合い」の文化を取り入れる～

キャリアや年齢に関係なく誰でも自由に“ワイワイガヤガヤ”意見を述べることができるというHondaの「ワイガヤ」システムを取り入れていると感じた。気軽に何でも言える雰囲気の中から自由な発想や面白い提案が生まれる。その「ワイガヤ」を最終的にまとめていくプロセスの中からリーダー役が生まれていく。これも組織活性化の仕組みとしてとても参考になった。

～「キミには期待してるよ」を示すことで地域の構成員のモチベーションを高める～

ただし、企業の論理をそのまま地域に当てはめたところで、ついてくる人は少ないだろう。そこできりぎりしじまで用意しているものが①先を見据えた中長期的ビジョンを示すこと②一つ一つの小さな（短期的）出来事を褒めること、の2つの仕組み。うまく作り、そして作用しているなあ、と感心した。

（1）20年先をイメージし、自立の先には何があるのかを示す

⇒地域と（キミと）一緒にまちをつくっていこうというメッセージを示す

（2）考えるプロセスを経験してもらい、プロセスの結果生まれたものを認めることでその人を認めること。地域レベルの表彰制度で当事者意識を持ってもらうこと

⇒答えが出るまで待つ

これは子育て本によく書いてあるが、大人にとっても同じなのだと思う。ただし、自分で解決する・面白さがわかるまで横でじっと我慢したり、さりげなく軌道修

正してあげる立場の人間が必要で、そこが一番難しいことではあると思う。

～まとめ・感想～

きらりよしじまでは、今後地域をどうしていきたいのか、という哲学（戦略）とそのためにはどうしたていくのかという仕組みづくり（戦術）という2つがうまく合わさって、ぶれない軸が住民にきちんと示されていると思う。やっている内容をそのまま真似してもうまくいかないと思うが、考え方は大いに真似すべきだろう。山形から全国に波及してほしい地域づくりのモデルである。

酒田市役所 松永 隆

“きらりよしじま”の高橋事務局長さんのお話、大変興味深く拝聴いたしました。

“きらりよしじま”は、地方が抱えるいろいろな分野の課題を束ねて、一つの取り組みで複数の課題解決を図っているという点で優れているのだと思います（自虐的ですが、縦割りで仕事の押し付け合いをしているような今の役所ではできないことです）。それには、強力なリーダーシップを持った高橋事務局長さんのような、それらの課題解決のプロセスをマネジメントする人材が必要ですが、“きらりよしじま”では次世代を担う人材育成の仕組みもしっかり体系付けられています。

川西町の吉島地区は、地方の小さな地域の理想的な形だと思いました。

しかし、全国どこの地域でも同じく取り組めることでもありません。私もいつも勉強会に参加して、いろんな気付きと刺激を分けていただいているのですが、逆にいつも少しへこんでしまいます。

ご講演くださる皆さんはとても熱心な方ばかりです。志高く素晴らしい取り組みに邁進されています。

日々の業務で汲々としている自分には、これと同じことなんてできない・・・

とても素晴らしい取り組みだと思ってもすぐには実行に移すことができない・・・

そんな自分や環境に、いつもちょっとだけ幻滅してしまいます。

だけど、愚痴ってばかりではいけないので、最近では、とにかく小さなことでも今の自分にできること（※）をやろうと気持ちを切り替えるようにしています。

“きらりよしじま”の取り組みにしても、全てを同じようにマネするのではなく、取り組めるものから、肩肘張らずに実行できるような仕組みが必要だと思いました。

北上市役所 菊池 明敏

圧巻だったのが「きらり よしじま」素直に感動しました。

私自身、実はNPOの理事をしていて、その立ち上げを行った経験から推し量ると、時間がなかったのか、はたまたあえてなのか、話されなかった裏の苦労、軋轢も個人的にはひしひしと感じられ、非常に感情移入させられる話の数々。

特に心に響いたのは、「全戸加入」で行う自治会のNPO化というとてもつらい事実と、じいさんばあさんが参加し、本音での話し合い&ワークショップ。蚊の鳴くような声の人たちが意見を出せる環境づくり。そして実際に行っている事実！

ワークショップに関して言えば、実は10数年前にこの手法に出会い、当時市の総合計画を作る担当だった際、ファシリテーションスキルなども学び、それを取り入れワーキンググループを導入して行った経験を持っています。その当時はほとんどまだ認知されていない手法ではありました。始めた頃はこれが全てを制する！とばかりにバラ色の手法であると信じていました。ある部分これは今でもそうは思っています。

ただ、そのすぐ後、10年ほど前になります。当市の「さくらホール」を作る際のワーキンググループに参加した際、自分の認識が少し変わったのです。

それは何かというと、場面によって使う方法は異なるものだということ。ワークショップが非常に有効な場面もあれば、(きつい言い方ですが) 児戯に終わる場面もあるということをしっかり認識しなければならないということ。

これは、さくらホール建設ワーキンググループの長をした、舞台技術では東北一と言われるほどの実力をもつ方から教わりました。この方は当時、会社専務でワークショップの技術も全国でもトップクラスの実力を持っていました。その当時ファシリテーターという言葉が出始めた頃の先駆者だったと思います。導入部やその後の議論の展開の場面には、ワークショップを使い、間に本音のぶつかり合いを挟み、勉強会を挟み、そしてまとめの段階では、ワークショップ手法を使わなかった。まとめの段階では、徹底的に本音と本音、持論と持論のぶつかり合い。この段階において、ワークショップを使わないの？と質問したことがあります。

「何が何でも合意形成、形を仕上げる場面では、逆効果。クールダウンも真剣勝負の議論の時には、逆効果になる場合がある」との答え。そういう会議技術だけに溺れちゃいかんということだろう。と。事務局が予定しないのに勝手に(笑)何回も自主的に集まって何度となく侃侃諤諤の果てしない議論。

結果、私の経験上、あれだけ熱くなって本気で本当の細部までこだわって本音のぶつかり合いをして、まとめあげたものは初めてにして最後となっています。その後、そういう場面に出くわしたことはありません。生涯にただ一度の経験になるかも知れないと思っています。

本音で本気で話し合った皆さんは、今でもホールに職員やNPOの形で深く関わっていて、この人たちはある意味私にとって戦友であり、運命共同体です。私がさくらホールで(醜悪にも)デカイ顔をしてのさばっている原点はこんなところにあります。

「ここは本音のぶつかり合い、否定大会も当然ありだろう？」と思う場面にワークショップを導入されると、肩透かしを食らったようで、「？」マークが並びことも往々にしてあります。白熱しているときにクールダウンが逆効果な場合もあります。

使う場面をしっかりと認識して使うことが必要と感じており、その技術だけに溺れるべきではないと思っているのですが、昨日の「きらり」の使い方は思わず「うまい！」と思いましたね。

声の小さい、または声をあげられない方々の意見を、声の大きな方のそれと同等に扱う仕組み。これこそ見事に終わらない本物だと感得した次第です。

それから、地域全戸加入のNPO組織。うちの弱小NPO150名から考えても有りえない！「驚愕」です。NPOは本来、志を同じくする人々の集まり。「志縁」です。しかし志縁ではない、地縁まですべて参加する「きらりよしじま」

裏の話について、事務局長の高橋さんとはあまり話せなかったのですが、事務局の小形さんから現実の苦労話をじっくり聞かせていただきました。非常に考えさせられる内容、今後の展望、その希望と不安、うちのNPOにも共通するところが非常に多く、ものすごい勉強になりました。また、高橋事務局長が言われた、「オモチャ」の仕掛けもうちのNPOでも、色々試行錯誤している部分であり、非常に共感を持ち、また非常に参考になった次第です。

この機会を設けていただいたOMに改めて感謝です。惜しむらくは、もう少しだけ「きらり よしじま」のお話を聞いていたかったと・・・。(笑) 後藤さんすみません！(笑)

山形市役所 大場 俊幸

人と組織の動かし方を知り尽くした圧倒的なカリスマ性とパワー、考え抜かれたビジョン、そして実行力。

動ける分野も役割も違うので、高橋さんの話を受けて自分が今具体的に何をやるかというのはそれぞれ違うと思いますが、高橋さんの話を聞いて心を動かされ、そして考えさせられたこと。これが、今回自分が得た大きな価値だと思います。

講演の中で高橋さんの声が少し小さくなっていった部分。

「前に立つものはいかなる批判も覚悟しなければならない」という趣旨のことを言っておられましたが、あの一言で、ここまでどれだけの苦労と努力の軌跡があったのだろうということが容易に想像されます。

今でこそ内外からの評価は大きいのですが、フロントランナーの宿命として多くの批判を乗り越え、結果を重ねてきたことの強さに改めて驚かされます。

何かを成し遂げるには、強い意志と詳細な計画、そして人を魅きつける情熱やカリスマ性が必要と言いますが、それが三拍子そろった高橋さんの講演、本当に有り難いものでした。

大変貴重な時間を共有させていただきました

高橋さんのお話を聞いて最初に感じたことは、ビジョンが単純明快である、ということです。地域づくりについて、将来に向けた期限（数字を挙げていること）を定めて活動していることが、明確にしている要因ではないかと感じました。よく地域づくりの目標は、明るいまちにしようとかいきいきしたまちにしようなど、漠然とした目標になってしまいがちです。そういう目標ではなく、「地域経営」というビジョンを持ち、徹底的に地域の課題や目的を見出していることに、これまで地域コミュニティが不足していた部分なのではないか、と感じました（大山地区等と比較しても）。

また、楽しんで活動を行うことがいかに重要かということも改めて学びました。地域から半強制的に選出される人たちを、いかに楽しませるか。大変なご苦労をされているとは存じます。そのような状況の中で、最初は楽しくないと思っていた人達をいかにその気にさせるか。そのヒントは、飲み会を頻繁に開くなどで、相手の考えや話を聞くことなどによって距離感を縮めることなのかな、と思いました。

そして、個人的に得た新たな「気づき」は、会議ではない話し合いの文化を取り入れる、ということです。恥ずかしながら、これまで私は「会議」も話し合いの一つだと思っていました。しかし、会議は特定課題だけの形式的もの、時間も限られます。話し合いは日ごろからの顔あわせであり、会議は話し合いには含まれないことを認識する必要がある、と思いました。

加えて、地域行事に対して PDCA サイクルを取り入れていることにも驚きました。

イベント等の行事はやることで満足してしまい、「振り返る」機会は大変少なく、行事の反省は一般的に反省会と称した飲み会だけになりがちです。しかし、PDCA サイクルの導入は、地域行事のマンネリ化を防止する一つの方法であると思います。PDCA サイクルに関心を持っていた中で、興味深い話であり詳しくお聞きしたいと思いました。

最後に、5月の中旬（勉強会后）に前横浜市長である中田宏さんの話を聞く機会がありました。

その中で行政は単年度で物事を考えてしまうので駄目、また、従来のやり方を新しい方法に改めるには、まず現状認識・共有が必要である、という話を聞きました。

行政職員は、年度毎で区切り予算を考え、また最近では財政難の影響で単純に予算のカットを行っている現状にあり、長期的なビジョンを持って仕事をするという感覚が弱いものになりがちです。しかし、地域づくりは、20年後（またはもっと長期間）を見据え進める必要があります。そして、地域づくりとは、住民と行政の両者による信頼・パートナーシップにより成り立つものであり、このことから、行政職員は地域づくりに長期的な視点を持ち、地域の現状を共有する必要があるということになります。

こうした中で、行政職員は会議ではない話し合いの文化の導入、特に業務内外でもっと地域に積極的に関わることが求められているのではないだろうか、ということも改めて強く思いました。

酒田市役所 國松 真也

やっぱり「きらりよしじま」の高橋さんの話はすごかったです。

単にNPOの現場でどんなことをしているのかという話ではなく、現場での実践の中から自分なりに編み出した、組織運営のメソッドを分かりやすく説明していただきました。机上の空論ではない、組織運営のメソッドは非常に説得力がありました。

(ただ、時間の制約があるのは分かりつつ、個人的にはもっと質問の時間をとっていただきたいかった……。講義の中では話されなかった裏話、NPOを地域で組織する際の課題など、聞きたいことがいっぱいありました。)

栗原市役所 三浦 愛理

“市民協働型の社会”と近年耳にする機会が増え、そのコンテンツもかなり幅広いものになってきており、理解と知識の提供をし合う事で将来的な相乗効果も期待できると興味を持っていました。

そんな折、勉強会で講演としてお話を聞き、公務員である自身「公」の立場と、市民であり地域住民の一人である自身「民」の立場の双方からあらためて考えさせられました。

基本的に、私が身近で見知る市民協働と、よしじま☆で展開されている内容は、大変な格差があり、「素晴らしい&ハイレベル&この域に到達するまでが、まず可能だろうか」と驚きでした。

しかし、足元を見てここまでのレベルが自分達が可能な範囲と位置付けるのは、誰から与えられたわけではなく自身が勝手に線引きをただけのもの。評価は周りがすることなのに全て自分完結しているだけか、講演の事例のように同調してくれる仲間を得るためには、何が「ツボ」か的確に捉えて実行に映しているか、の違いなんだと思います。

その取り組みのコンテンツだけでなく、基本の体制に始まり常にリニューアルしていく躍動感が、私にはすごく考えさせられる印象的なものでした。

行政がすべきことと市民が自主的にできることを分担していく、単にそれだけではない本来の協働って最大値は何なのか、どの域なのか……。いい意味でますます分からなくなりました(笑)

今後も、公私共に考えていくテーマの一つとして、大変貴重なお話をうかがえたと思っています。大変ありがとうございました。

北上市役所 佐藤 美和子

アイデアが満載の講話で、あっという間にメモ帳がいっぱいになりました。人を惹きこむパワフルな講演スタイルに圧倒され、思わず“なるほど。”とか“すごいなあ。”と声をもらしながら傾聴しておりました。時間があれば、もっともっとお聞きしたかったです。その中でも心に残ったポイントが次の3点でした。

- 地域といかに密着できるか、どう入り込んでいくか。
- 20年先の持続可能な地域経営をイメージしてまちづくりを行っていること。
- 教育の福祉の融合について考える場、気付きの場を作っていくこと。

特に、ミニデイサービスを小学校で開催し、高齢者と子どもたちが交流する機会をつくる取り組みが面白いなあと思いました。しかも、お互い、授業参観ができるように休憩の時間を15分ずらしているという点が何とも上手い仕掛け！学校側にとっても、地域の方に学校に入ってもらうことで、防犯にもなっています。

ちょっとしたアイデアが、まちの至るところでキラリと光っていますね。今後のまちづくりの参考にさせていただきたいと思います。貴重な機会をいただきまして、ありがとうございました